

宝寿の風

第2号

発行者
宝寿院住職
田辺信雄
TEL 62-5739

宝寿院住職 田辺信雄

寺報「宝寿の風」第二号の発行にあたり、宝寿院の檀家の皆様から昨年中賜りましたたくさんのご厚情に対しまして、改めまして深く感謝申し上げます。大変お世話になりました。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、昨年は未曾有の経済不況のなか、「人の幸せとは何なのだろう」ということや、物のあふれる豊かな生活の中で見失ってしまったもの、忘れていたものを、改めて考えさせられる一年でもあったように思います。

仏教に『志意和雅』（しいわげ）という言葉がありますが、これは、心持ちが素直で柔和であることを意味します。そして、「志意和雅なるは、よく菩提に至る」とさ

れています。「菩提に至る」というのは言い換えれば仏の心になるという意味ですが、もつと分かりやすく言えば、「真に幸せになる」ということでもあります。

今年一年が檀家の皆様にとって幸多き年であることを心からご祈念申し上げます。

合掌

宝寿院別院の整備すすむ

この度、寄木戸の旧坂本長太郎邸を当宝寿院が譲り受け、宝寿院別院として整備・管理することになりました。

敷地は約一〇〇〇㎡あります。

母屋は昭和32年に建立されたものですが、屋根裏には、もっと古い時代の手斧（ちような）で削った梁が使われています。

この母屋は別院の庫裡（くり）とする予定で現在改修を進めています。当時の農家の建築様式を伝える貴重な建物でもありますので、できるだけ建築当時の姿を残したまま復元したいと考えています。

改修後は、寺で利用するだけでなく、地域の皆さんに、心安らぐ交流の場として広く利用していただいたり、地域文化発信の拠点として活用したいと考えています。



います。

また、屋敷内には、成田山新勝寺から勧請した不動明王を祀る祠（ほこら）がありました。これを期に新たに不動堂を建立し、これを宝寿院別院の付属仏堂として考えています。檀家さんや地域の皆さんたちの心の拠り所の一つになれば幸いです。完成の暁には、是非お参り下さい。

平成二十一年 寄進者ご芳名

昨年中に檀信徒の方々より、ありがとうございました。ご紹介致します。

- | | |
|-------------|-------|
| 一、本堂空調設備一式 | 服部和悦様 |
| 一、本堂大改修工事費 | 井桁樟治様 |
| 一、墓参者用水道設置費 | 峯崎知二様 |
| 一、本堂内荘厳具 華蔓 | 橋本悦枝様 |
| 一、庚申堂 猫足釣灯籠 | 坂本和芳様 |
| 一、庚申講御供米一俵 | 峯崎英光様 |

本堂内に二機の業務用大型エアコンを設置していただいたことで、寺の行事や法要が、暑さ寒さを気にすることなく、一年を通して大変快適に行えるようになりました。

また、本堂改修により、本堂の中にあつた階段が外階段になり、床も絨毯から畳敷き替えられました。建具も新調され、使い勝手が格段に向上するとともに、外観も大変お寺らしく立派になりました。また、屋根に積もつた雪で、長年破損したままになっていた雨樋も全て交換修理され、新たに雪止めの瓦も入れていただきましたので、これからは雪が降っても安心です。

さらに、本堂西北に新たに水道が設けられ、墓参者が便利に利用できるようになりました。

本堂内陣には、これまでなかった華蔓(けまん)という飾りや、庚申堂には一对の電照釣灯籠が寄進され、内陣・堂内が一層荘厳になりました。

ありがとうございました。

温故知新① 植松街道

江戸時代中頃から明治時代にかけて、江戸(東京)からたくさんの方の生活物資を積んだ帆船が、利根川をさかのぼり、古海までやってきていた。昔、利根川は高林を流れていたが、古海から先は浅瀬であつたり急流であつたため、ほとんどの舟荷はここで

降ろされた。ただ、利根川の水量や風などの条件が整えば、古海から先まで舟が行くこともあつたので、古戸や高林にも問屋があつたそうである。

そのため、古海には大量の船荷を扱う大きな問屋があつた。また、それらの帆船は帰路には、主に東上州の産物を買付け帰つたので、寄木戸の庚申堂から源忠稲荷(げんちゆういなり)の間は、そのための荷駄の集積場となつていて、古海の間屋が仕切る産物の取引所が設けられていたそうである。

たくさんの方が集まつたこの区間の道路南側には、当時、餅屋、油屋、そば屋、穀屋、材木屋、こんにやくやしんなどを出して客をもてなす『的場』(たてば)という茶屋などが軒を連ねていて、さながら小江戸のような賑わいであつたという。

しかし、大正6(1917)年に館林・小泉町間で営業開始した中原鉄道(ちゅうげんてつどう・現東武鉄道)小泉線の開通による鉄道輸送の発達によつて、河川を利用した水運は急速に衰え、それとともに寄木戸のかつての賑わいも完全に失われてしまった。

往時をしのぶものはほとんど姿を消して

しまつたが、庚申堂と源忠稲荷だけは昔と変わらない場所に今も祀られている。

また、今でもこの区間の道路北側に約6〜7m幅の不用道路が残つていたり、現坂本新一家が、今でも『餅屋』の屋号で呼ばれていたり、当時庚申堂の東北側に祀られていた日枝神社の社地一帯が、今でも『山王』(日枝神社の別称)と呼ばれていたりするものもこの時代の名残である。なお、この日枝神社は、明治42年に長良神社の境内に移築され、坂本一族の氏神として祀られている。

ところで、古海で降ろされた船荷は、尾島、境方面まで陸路で運ばれていた。古海の船着き場から太郎坂を下り、仙石、寄木戸、現在の六道の辻を通つて矢島へと続くこの道沿いの寄木戸部分には、延々と松の木が植えられていたので、昔の人々はこの松並木の道を、植松街道と呼んだという。

別名花見街道とも言つたそうだが、植松街道には桜の木はあまりなかつたそうである。これは荷車で綿花を運ぶことが多かつたので花荷街道と言つたのが、いつしか花見街道となつたのだらうということである。

昭和44年頃 故野村七男翁から伝聞